

第二章 尾張富士 山上の誓い

1 “同じことを考えている人がいた！”

七月十八日の新聞報道を見た私（浜島辰雄）は衝撃をうけた。「私と同じことを考えている人がいた！」。昭和十九年六月の大旱魃の時に、この惨状を解決するには、満鉄時代の経験により、木曾川からの導水以外にないと考え、戦後の郷里の復興はこれしかない。しかし、自分一人の力では何ともならない。まず子供達を教え、仲間を作り、いつの日か立ち上がることを考えていた。そんな矢先、この新聞の記事を見て驚いた。

そこで、是が非でも久野庄太郎さんに会うことが先決だと考えて、安城農林学校での当面の農業実習を片づけて久野庄太郎さんに会う準備をした。

用水建設の中心人物である久野庄太郎さんは、前年の安城農林学校の夏期大学（夏休みを利用して、当時の一流の農学者や農業経験者を講師にして、全国から聴講者を集め、学校の生徒の寄宿舎を宿舎にして約一週間の講習会を開いた）のとき、その締めくくりに、山崎延吉先生、岩槻信治（稲の品種改良の神様といわれていた）、久野庄太郎（多角的経営の篤農家）、鎌田由一（移植麦多収の篤農家）ら五人の座談会を開いて大変好評を博した久野庄太郎である。

久野さんとの出会い

第一日。昭和二十三年七月二十一日。

久野家は知多郡八幡村寺本であり、大府の桃山町の自宅から自転車で一時間はかからない。その場からでも踏査できるように、古い五万分の一地図を図囊ずのうに入れて、家を朝九時頃に出て、吉田―横須賀―養文やぶ―寺本と自転車でひた走り、寺本の駅付近で久野家を尋ねて、それらしい家の縁側で機はたを織っている上品なお婆さんに声をかけた。「久野庄太郎さんの家は、こちらですか」「ああ、そうだがね。用水のことで来ておくれたかね?」「そうです。私は安城農林学校で教師をしている浜島辰雄というもので、用水のことで話を聞きたいと思って来ました」「それはよく来ておくれた。庄はね、今日、山崎先生の所に呼ばれて安城に行きましたかね。あれのことで、いつ帰るか、わからないから、どうしましょう」。私は、「近い所に住んでいます。大府ですから、明日また来ます」というと、お婆さんは、「それは悪いね。明日必ずいるかは、わからぬがね」「いいです。急ぐものではないですから」と、帰路は山道を緒川新田経由で帰った。途中、各所でポンプを使って山田に水を汲み上げている人に出会った。

第二日。七月二十二日。

今日は会えるかどうかからぬが、朝八時頃出発、八時四十分頃久野家に到着。お婆さん一人のようだ。お婆さんはさも気の毒そうに、「今日は県庁に呼び出されて出かけました。また、あれのことで、いつ帰るともわからぬが、明日あしたは必ず家にいると言って出て行きました。

た。うちの庄は悪い子でね、自分一人で遊べばよいのに、連れを作って遊ぶで困る。あんたも、遊ばれてしまうから、うちの庄の連れになりなさんなよ。うちの庄は、今度は、なーも知らんくせに用水の持ち出して弱っております」と言っ、私の顔を眺めておられた。何か親心で、助けられるものなら助けてやってもらいたいというような心がありありと伝わってきた。この人は庄太郎さんの母親の「よし」という人で、その後も、私のことを「大府の若い衆」と言っ、亡くなるまで可愛がっ、下さった。

第三日。七月二十三日。

今日こそは、と自転車をこぐ足に力が入り、九時頃八幡に到着。お婆さんに会った。お婆さんは、「今日はおります」と嬉しそうに話してくれた。これから五町（約五〇〇メートル）ほど東に行ったところの長曾ながそという所の畑で芋に肥をやっております」と言われ、三回も来ていたので道もよくわかり、東へ急いだ。集落はずれの芋畑で肥をやっていたそれらしい一団の人に会った。久野さんらしい人が畑から走り出して来て、信濃川（八幡村の信濃川）の畦道で会った。そのままそこに腰をおろして挨拶抜きで話が始まった。

「私は安城農林で教員をしている浜島ですが、昨年の夏期大学の講習でお会いしております。新聞を見て驚いて会いに来ました。私も木曾川からの用水の研究をしておりますので、どういう計画か、会っ、話がしたくて来ました。私は豊明の生まれですが、安城に出る関係で大府に住まっております」

久野さんは、

「私は百姓で計画のことは何もわかりません。ただ水がほしいだけです。よい計画があっ



久野庄太郎（左）と浜島辰雄との出会いは大きな奇跡を生み出した

たら教えてください」

と言われた。

「私は戦争末期、小牧の陸軍幼年学校で教官をしておりましたが、郷里が豊明の大脇というところの百姓の生まれです。家では兄貴が昭和十八年に死んで、八十一歳になる父親と嫂わいよめと孫が百姓しております。十九年の大旱魃の時に、六月末になっても田植えができずに困っていると聞き、土、日に自転車を手伝いに行きました。学校が三重高等農林学校卒業であり、農業土木の勉強もしましたので、昔からいわれている、木曾川から水が引けないものか、計画を作ってみました。

その後、少しずつ計画を直した地図を持っております。戦後の日本の復興は、この地域ではこれしかないと思っていたところ、久野さんの新聞記事を見て驚いて、学校の夏期実習を片づけてとんできたわけです。地図は不完全なのですが、新しい二万五千分の一の地図があれば、およその計画図はできます」

私は一気にこれまでのいきさつを話した。

久野さんは、

「地図なら、いまから亀崎の岡田前東海軍管区司令官の家に行ってもらって来ます。明日から現地を歩いて、地図を見て用水計画の作り方を教えてください」

と言う。そこで私は、

「私の作った古い地図を持って行きますから、もらってくる地図に新しい用水計画を入れましょう。それでは、用水計画の基点となる尾張富士に登って、そこから、上流のことは後にして、下流に向かって二、三日歩きましょう。二、三日泊まるつもりで、米と必要なものを持って、明朝八時、名鉄・神宮前の駅のホームで犬山行きに乗ります。詳細は現地できめましょう」

と約束して別れた。私は、これは（用水造りが）意外に早く来たと驚きながら、七曲、緒川新田、米田と帰路につき、明日必要なものを準備した。そして、改めて古い地図を再点検をした。

2 水路の実地踏査

尾張富士 山道を登る

第一日。

翌七月二十四日、三日分の米、地図、ハンドレベル、双眼鏡などをリュックサックと図嚢に詰め、名鉄神宮前のホームで待つこと数分、八時ちょっと前に久野さんも作業服にリュックサック、地下足袋姿で現れた。いずれも犬山行きのキップを用意して、犬山まで直行、犬山から逆の上飯田行きに乗り換え、羽黒駅下車、徒歩で尾張富士山道を登った。途中、いろいろな話は尽きなかったが、私のいままで来た道を話し、また小牧―長久手の戦史など、家康と秀吉の治政、合戦の話もしたことを覚えている。

また、尾張富士（標高二七七メートル）、本宮山（同二九三メートル）が天地開闢かいびやくの時代に高さ

を競って、山上に樋を架けて水を流したら尾張富士の方に流れて、尾張富士は口惜しく、一寸でも一尺でも高くしてくれたものには願いを叶えてやると、旧暦の八月一日の石上げ祭りが始まったといった愚にもつかない話に笑いながら、私は尾張富士の正面で伏し拝み、別峯の方に登り始めたら、久野さんは怪訝な顔をしているので、「尾張富士山頂は松や杉で見透しがききません。こちらの山はちよつと低いが見透しがいいです」と言うと、「どうしてわかるのか?」と聞かれた。「地図を見ればわかります」と言うと、「地図にはそんなことまで書いてありますか」とまたたずねる。「記号を見ればわかります」と、どンドン進んで行くくと、久野さんは不思議そうに後からついて来た。

適当な広さの所を見つけて、久野さんの持つて来た、二万五千分の一の地図を押しただいてから、地図を磁石で北に合わせて、何枚かを継ぎ合わせて説明を始めた。

「現在地はここです。尾張富士の山頂はこちら、向こうの高いのは本宮山、犬山はこちら、犬山からまっ直ぐ、水路があるのが木津用水、その先の山が小牧山、反対側を見て、下の大きな池が入鹿池、あの高い山が高社山、その上が八曾山、木曾川は見えませんが、犬山から尾張平野を廻って海に流れている。」

昔（尾張徳川の初め）、木曾川は尾張平野を五本になって乱流していたが、戦国時代も終わり、戦争中の足輕、人夫などを定着させるために、木津用水、入鹿池を造り、定着させた。そして、五本となって犬山から乱流していた木曾川の堤防を犬山城下から羽島方向に強化して、美濃側よりも三尺高くして洪水は必ず美濃側に切れ込むようにした。これを尾張の御囲堤といい、美濃側は輪中堤を造り守った。

そして犬山に筆頭家老の成瀬隼人頭を置き、西への備えに兼山にあった森長可（蘭丸の兄）



尾張富士の山頂に誓う
〔『不老』紙 平成4年11月5日号「不老漫録」より〕

の居城を犬山に持って来て、渡河点の押さえと御囲堤の監視をさせた。美濃側の輪中堤はそれから百年後の大永年間にほぼ完成した。尾張側は安泰、木津用水、入鹿池を造って、足輕、人足を定着させた」

と、つつい、木曾川にまつわる歴史談議になつてしまった。

「見て下さい。用水のある地域は、延々青田が霞んで、村も立派ですが、用水のない東の丘陵地帯は、禿山の上に、細々とした集落があります。そこで、北の方、木曾川から水を引いて用水を造ろうというのが、これからの仕事です」

と言うと、久野さんは飛びついて来て、「よし、やりましょう」と言つて、顔を涙でくしゃくしゃにして手を握り合つた。その久野さんの顔をその時から六十年を経て、今でも思い出す。

「木曾川の取入口の調査は後にして、これから下流の方向に向かって調査しましょう。上流の取入口の高さは九〇メートルとすると、この図のように入鹿池の上流に水路を持つてくるのはむりです。その時は城東村の山裾を縫つて流下させ、入鹿池の下を通つて篠岡村の大山に出ます。私達はこれから、そちらのルートを通つて、坂下村から高蔵寺町、尾張旭町に出しましょう。今日は尾張旭の愛知県の森林公園で泊めてもらいましょう。私の安城農林時代

の同級生の福和郁郎君がいるはずですから。所長は酒井九二正という四年先輩です」

と今日の予定を話して入鹿池の堤体の上に出て、鳥坂峠とらさかを通る。水路の予定は鳥坂峠の頂上で白山トンネルに入り、大山に抜ける案を説明。当地篠岡村には、研農会員の伊藤告重がいるが、いずれ次の機会に会うことにして、白山トンネルの出口から大山集落の下を通って、坂下村に入り、高蔵寺サイフォンへと向かう。ここは幹線第一の難所、庄内川を渡る。右岸は高蔵寺の台地より、左岸東谷山に大サイフォンを建設し、国鉄中央線、国道十九号線を一気にクリアして、用水路の計画は、志段味村から尾張旭町に入り、県森林公園を突き抜けて瀬戸市の西を幡山村、本地付近を通る予定。

用水路踏査の第一日は夕暮れ近くなった。愛知県森林公園に同級生福和がいるはずで、泊めてもらうつもりで訪ねた。しかし、あいにく彼は外出中で、中にいた職員は「間もなく帰る」と言ったが、私たちの人相と服装が悪いので、夜中に居直り強盗になられるではないかと、言を左右にして泊めてくれそうにもない。あれこれ言っているうちに、福和が帰って来た。「福和君、浜島だよ。今晚泊めてもらいたいと思って話しているところだ」と言うと、「なんだ、浜ちゃんか。久しぶりだなあ」と言っつて顔をまじまじながめた。卒業以来十三年ぶりだ。

彼は日進村の岩崎の出身。「なんでまた、突然？」と言うから、私が「木曾川からの用水造りの現地踏査をやっているんだ」と言うと、「なんだ、浜ちゃんがやっているのか?」と言う。隣に立っている久野さんを紹介すると、「そうか。県の林務課にいる福和といいます」と名乗り、「まあ、泊まれ」と、客間に案内して、昔話や、いまの話に弾んだ。「暑いから汗を流して」と久野さんに入浴をすすめ、夕飯前にまず一献と久野さん持参の干物と酒のうま

かつたことが忘れられない。

農林省開拓局長は豊明出身

第二日（尾張旭から豊明、七月二十五日）。

翌日。早朝、握り飯弁当を作ってもらって、出発。尾張旭の三郷から本地で矢田川を越え、今の愛知医大の付近を通って、長久手村に入り、徳川家康が腰をおろして督戦したという床几岩の由来を話し、香流川をサイフォンまたは水路橋で渡り、五色園の付近を通って機織池はたおりの東を通過、米野木から東郷地内に進み、海老池えびの西で大きく右折し、和合ゴルフ場の東端を抜けて豊明地に入る。

計画路線の勾配は用水路四千分の一、トンネル千五百分の一、サイフォン四百分の一で、ペーパーロケーションをしてきたが、いままでは尾張東部の山続きで、標高八〇メートル〜七五メートルを維持できたものの、飯田街道を越すと山が低くなり、どこかで二〇メートルくらいの落差を取り、標高六〇メートルから五五メートルの地点を選んで、ゴルフ場の東端を通って、豊明村の若王子、勅使池の西を通り、中京競馬場の西へ廻り、桶狭間の古戦場西付近で旧東海道、国道一号線、名鉄をサイフォンで越すあたりで夕方。

その晩は私の実家で泊まるつもりでいたら、久野さんは農業会長の三浦青一を訪問すると言い、彼を訪ねた。三浦青一は私の従兄。「まず、泊まれ」と言うので、そこで泊まることにして話が始まった。

三浦青一が久野さんとそれほど親しいとは知らなかった。やはり、研農会の仲間だ。そこで出た話に、豊明村中島は、現農林省農地開拓局長伊藤佐の郷里で、そこに禪源寺ぜんげんという尼

寺があり、伊藤両村の墓がある。旧盆には彼は必ず墓参に来る。彼の祖父伊藤両村は国学者で、刈谷藩主土井公の信任厚く藩儒であった。その子は軍医監として石黒忠篤氏の父君と同期、そのため伊藤佐は石黒忠篤氏の信任厚く、現在農林省開拓局長で、農業用水建設の窓口である。

旧友村山錐治、近藤博文、近藤為助などが集まって一席設ける。その機会に木曾川疏水の話すれば、絶好の機会だ。思わぬ希望が湧いた。

第三日（七月二十六日）。

いよいよ知多半島に入って来た。地藏池をサイフォンで越し、大高の文久山、ここには久野の旧友柴田義勝が帰農している。畑で偶然にも会った。彼は独学で中日新聞の論説委員となった人であり、久野さんとは親しい仲。柴田も七月十七日の新聞で木曾川用水のことは知っていたが、そんなことは夢のようなことだと考えていた。「本当に来るか？」と驚いた。久野さんが、「これからは世論の時代、世論さえ高まれば、技術的にはできるといふから、柴田さん、しつかり中日にネジを巻いてもらいたい」と言うと、柴田はよほど驚いたらしく、「この俺のところを通るのか。それは面白い。若い連中に大いに力を出させよう」と意外なところで意外な人に会って力づけられ、だいぶ時間をとった。文久山を過ぎて、主水池^{かがいけ}上に出た。

ここは国鉄東海道線と主水池をサイフォンで越し、大府の木の山部落の東から旧三菱の飛行場に至る地域が知多半島の根つこの部分で、標高が一番低い。ここは標高四〇メートルくらいで、木曾川の取入口から約六〇キロ、東郷で水位を標高七〇メートルから五〇メートル

に落とし、この付近の水位を四〇〜四五メートルくらいで通過して、大府―横須賀街道を北加木屋で越し、加木屋大池で東浦支線をポンプアップして分水後、南加木屋南端、大田川の分水嶺付近で八幡側にサイフォンで越す。

当日は木の山、長草付近で踏査を終わり、大府農協で慰労会をやってくれとの約束があつて、大府農協に行く。

〔同志会員出席者〕

大府農協組合長 鈴置理樹雄

同専務 高井良雄

農村同志会長 山口治兵

同副会長 加古与市 久野忠雄、広瀬健一ら

私が図面に基づいて、いままでの経過を説明し、久野さんから感想と感謝の言葉を述べた。酒が腹わたにしみ込んで、知らず知らず涙が溢れてきた。

明日は自転車で大府、横須賀街道交差点を始点にして踏査を進めることとして、久野さんは長男彦一がオート二輪で迎えに来たので、私は皆様の心を感謝しつつ自宅に帰った。

3 「愛知用水」と命名

第四日（七月二十七日）。

大府―横須賀街道、加木屋入口に九時集合、稜線に沿って南下、加木屋大池に至り、東浦支線（受益地、大府―東浦―有脇―亀崎―乙川）は標高が高いのでポンプアップ。

幹線は大田川の最上流、阿久比川との分水嶺付近をサイフォンで知多側に向かう。原の高根に登って付近一帯の計画を練る。

久野さんは古びた松の切り株に腰をおろして、はるか伊勢湾の光って見える八幡の自宅の方をながめて感慨深げに物思いに沈んでいた。

私は、これから先の複雑な知多半島の尾根をどのように導水するか、現地と地図を照合していた。日は西に傾いて伊勢湾が白く輝いていた。よし、これからは、トンネル、サイフォンで半島のまん中を導水し、必要な部分はポンプアップすればよい、と思案をきめた。そこで、久野さんに声をかけた。

「いよいよ郷里まで来ましたね。私は毎日、この地図に要点を記入して、あとは上流の取水、導水路を考えればよいところまできました。この用水も、間もなく図上で生まれます。いつまでも名なしの用水では困るので、この用水の名前をつけて下さい」

と言うと、久野さんも夢から覚めたような顔をして、

「それを私も考えていたが、『愛知用水』という名がよいと思うが、私の隣に地主の早川丈太郎という人の娘に正子というのがある。それが香道と命名に凝っている。それに相談してみるから、二、三日待つて下さい」

と言った。

「それから久野さん。この先は用水の量が毎秒十二、三立方メートルになりますので、ここから下流は踏査を後にして、上流の取水点と岐阜県内の計画をやりましょう。都合がよけ

れば、明日、また朝八時に神宮前駅集合で、犬山―御嵩線で兼山―八百津―丸山に行って、水源の計画をしましょう」

と言うと、

「よし、わかった。今度は靴は履いていきません。明日までに用水の名前をきめます」と言っただけで別れた。当日は自転車で来ていたので、都合よく帰れた。その日は早かったので、上流の計画を図上で検討しておいた。

第五日（七月二十八日）。

例のごとく神宮前に集合。犬山から御嵩線で兼山まで直通。車中久野さんは、『愛知用水』と墨書した紙を出して、「字画もよいし、通りもよい、必ずできる」と嬉しそうに見せてくれた。

「よし、『愛知用水』でいこう」と二人できめた。その紙は今あるのかな。探したが、わからない。

4 木曾川上流取水点の決定

兼山まで電車で直行できたので、兼山発電所で次頁のような資料をもらった。愛知用水の取水点の計画は兼山ダム左岸より毎秒三〇立方メートル取水。標高兼山ダム 最高水位 九四・五メートル。最低水位 九一・五メートルで取水。兼山町筋と木曾川の左岸を暗渠、トンネルで伏見まで導水。伏見の柿畑付近でトンネル出口の選点をしていたら、後から、

「おい！ 柿盗人には早いが、俺の柿畑で何しておる！」

と五十がらみの親爺が出て来た。久野さんは、

「私達は知多のものだが、木曾川から知多半島に用水を造ろうと思つて、現地を見ている。黙つてあなたの畑に入つて悪かつた」

と言つと、

「俺はこの山口代四郎という者だが、まあ、俺の家でお茶でも飲んでいけ」

と、怒りもせずに、お茶を出してくれた。

「俺はこの発電所造りから、この送電線造りなど関西電力の手伝いをやった。用水はこの送電線に沿つて行けば知多の方に行けるだろう。どうだ、用水の『サガリ』Ⅱ（勾配）は

*木曾川下流発電所の概要（関西電力）

項目	兼山発電所	今渡発電所	八百津発電所	
形態	ダム式	ダム式	水路式	
発電能力	三九、〇〇〇kw	二〇、〇〇〇kw	一〇、八〇〇kw	ダム式 一八八、〇〇〇kw
落差	二三・一六m	一二・二一m	四六・二〇m	八〇・七〇m
使用水量	二〇〇立方m	二〇〇立方m	二七、八八立方m	一八、六〇〇立方m
流域面積	二、四五二平方km	四、六三三平方km	二四〇・九〇〇平方km	同上
貯水量	三、八二三、八〇〇立方m	四、一七五、三〇〇立方m	一七、五九八、一〇〇立方m	一二五、〇〇〇立方m
堰堤高	二八・五m	二〇・八〇m	二八・五メートル	八〇・七〇m
発電開始	昭和十八年	昭和十四年	始動中	計画中

一間に二厘か三厘か」

と言ったのには私は驚いた。一間に二厘で三千分の一、三厘で二千分の一、ピタリである。世の中、偉いのが田舎にもおるものだ。久野さんはそれ以来、上流に来るたびに何か土産を持って立ち寄った。

その付近から用水は開渠で大きく左折して可児川をサイフォンで渡り帷子かたびらから県境を善寺野までトンネルで越し、城東村の山裾を延々尾張富士に向け、尾張富士の下をトンネルで流下、入鹿池の下流約一キロの所を水路橋で渡り、鳥坂峠から白山の下をトンネルで抜ける計画で、七月二十四日の調査ルートと結合させた。

知多半島の原の高根以南については、主として、二万五千分の一の地図で検討し、不明の部分は現地と照合し、師崎に至るルートを決定した。製図作業は安城農林学校の製図室、寄宿舎の舎監室の机のガラスを透写台にして作業をした。深夜、トイレに起きてきた生徒が、「手伝いましょう」と言ってくれたが、生徒ではちょっとむりだ。「ありがとう。風邪をひくといけないよ。明日もあることだから早く寝なさい」と言ったが、しばらく私のやることを見ていて、そっと部屋から出て行った。

知多半島の内海出身の生徒大岩義昌君のことは忘れられない。NHKテレビで放映された「プロジェクトX——いのちの水 暴れ川を制圧せよ——日本最大の愛知用水」(二〇〇一年五月二十八日)を見て思い出の手紙をくれた。彼は内海のみかん栽培の元祖、大岩金右エ門さんの子息、長兄は安城農林で私の一年上、大岩金一郎といって級長をしていたが、昭和九年卒業、十年入隊、支那事変に出征間もなく戦死した。惜しいことをした。

義昌君は末弟で安城農林、昭和二十四年四月卒業で、夏期実習で寄宿舎に残留していて手

伝うと言ってくれた生徒であった。五十数年前のことをよく忘れずに手紙をくれた。

5 「愛知用水概要図」の作成

用水の現地踏査は一応昭和二十三年七月二十八日で終わり、先にも書いたが七月二十九日から安城農林学校の夏期休暇間の農場実習を兼ねて、農林学校の舎監室の机上のガラスを透写台にして、愛知用水の計画概要図の作成をした。

「愛知用水計画概要図」作成（昭和二十三年七月下旬）

愛知用水の取水点を兼山発電所堰堤左岸九四・五メートル（九一・五メートルと定め、開水路 四十分の一、暗渠トンネル 千五百分の一、サイフォン四百分の一の勾配で図上、現地踏査で幹支線水路の位置を二万五千分の一の計画図に入れ終わったので、これを透写して、丈夫なトレース紙上に写して、「愛知用水計画概要図」とし携行、掲示に便利ないように軸装とした。

「愛知用水概要図」（昭和二十三年八月十日頃完成。本書別刷り付録）

愛知用水諸元

- ① 関係市町村 四市四八カ町村
- ② 導水路延長 幹線一二〇キロ 師崎先端まで主なる支脈線 一八二キロ
- ③ 水源 瀧越、丸山その他に四億立方メートルを貯留し、木曾川の最少流量を一四

○立方メートル以下にならないように調節する。

④現況 木曾川の水利用状況は次の通り。

農業用水	五二・四七立方メートル
上水道用水	四・〇五立方メートル
工業用水	〇・六五立方メートル
舟航用水	五五・〇〇立方メートル
計	一一二・一七立方メートル

であるから、最小流量を一四〇立方メートルとすれば、毎秒約二八立方メートルの余裕を生じる。(水谷将『日本河川論』より。岩塚^{いわづか}資^{すけ}資料)(岩塚資は不老会村上悠起夫の実兄)

⑤愛知用水計画受益面積

既設耕地	水田 一九、〇〇〇町歩
	畑 一一、〇〇〇町歩
新設耕地	水田 四、二〇〇町歩
	開田 三、三二〇町歩

干拓	一八〇町歩
溜池跡地	九〇〇町歩開田(溜池の六〇%)

畑地	四、〇〇〇町歩
----	---------

合計	四二、六〇〇町歩
----	----------

⑥事業費 五〇億円

⑦本計画の特色

(イ) 水田の畑地化(田畑輪換)

(ロ) 畑地灌漑(一般作物、果樹、野菜)

(ハ) 商工業用水(飲料水)、防火用水。

(ニ) 溜池利用による洪水防禦、用水利用

⑧これによる利益

(i) 増収量 米二〇万七五二〇石 七億六四〇八万円

その他野菜、 麦二四万二〇〇石 六億五〇万円

果樹甘藷増加 一六七〇万七〇〇貫 三億円

計 一六億六四五八万円

(ii) 畜産、土壤水分増加により牧草が繁茂。乳牛は四倍、園芸作物、農村工業の増加により豚十倍。

(iii) 農村工業は原料増加と用水補給など電力増加により発展する。

(iv) 工業用水、上水道用水、防火用水、衛生用水の供給増加。

(v) 海産物、ノリ、魚介類の増加。

(vi) 木曾川総合開発による電力量、二五万キロワット

地区内落差利用による発電、一、五〇〇キロワット

この計画書を久野さんの家で広げて説明した。久野さんは、「ううん、これはよい。さつそく『お菊さ』の所に行つて表装してもらおう」と言い、「もう書き足すところはありませんか」と言うから、「表装してからでも書き足せるからこのままでいいです」と言うと、高

横須賀の中学入口にある腕のいい表装屋に丈夫に破れないよう、早く、と頼んだ。「四、五日待って下さい。よく乾いてからでないと剥げてしまいますから」という。

6 農村同志会の用水運動初会合

昭和二十三年七月二十四日からの、久野さんと私の現地調査によって、「愛知用水」の計画概要がまとまったので、次の段階として、農村同志会が中心となつて各学区ごと説明会を実施することになり、市町村が歩調を合わせて進めるために農村同志会の初会合を実施した。愛知用水の計画概要図の表装はできていなかったが、つぎはぎのまま、山崎先生に御出座を願つて、説明会を八月七日、武豊の堀田稲荷で開催した。

イ. 出席者

大府町	山口治兵、加古与市、山口彦二、浜島辰雄
東浦村	水野源次、戸田健太郎、平林利
有松町	神谷庄一
上野村	石田季之、小島正雄、本田佐久治、近藤鍵三郎
横須賀町	神谷甚九郎
八幡村	久野庄太郎、緋田工
阿久比村	竹内唯男、山本孝平、竹内好吉
常滑町	稲葉忠雄



山崎延吉先生を囲んで。愛知用水の着工を祈願する農村同志会会員
(昭和23年8月7日、武豊掘田稲荷にて)

武豊町 坂口善夫

西浦村 中野三一、谷川忠三

河和町 榊原文英、橋本栄一、富谷茂吉、野田虎吉

内海町 石黒新三、大岩源平

野間村 渡辺万吉

豊明村 三浦青一

特別出席 山崎延吉、黒田毅(安城農林教諭、のち守山市長)、

木村總平(美濃太田)、田村金平、明壁京一(小

鈴谷)

決議事項

① 市町村長に強力に働きかける。

② 知多郡外、愛知、東西春日井郡、三河部にも働きかける。

③ 水源地の現地見学会を実施する。

④ 市町村内各学区ごとの説明会を開催する。

⑤ 浪曲師三門博(ひん)を呼んで「都築彌厚の苦心談」で人を集める。

*浪曲師の決定。三門博のこの地方の興業権を安城南明治の山口老人が持っているというので、翌日、私が交渉に行った。三門博はギャラが高いし、毎日連続というこ

とはむりだ。そのかわりに梅ヶ枝鶯というのがいるから、それがよい。一日一万円とのことで、久野庄太郎が交渉、山口老と話し、梅ヶ枝鶯と決定。

7 愛知用水取水点の見学会

第一日 木曾川最下流今渡発電所に集合（八月十二日）。午前十時。

名鉄犬山駅乗り換え、御嵩線、今渡下車、徒歩十五分。

全員、まず午前十時に今渡の木曾川最下流の発電所に集合、水力発電所がどんなものであるかを見学し、木曾川の年間流量状況聞き、今渡より電車で兼山へ行き、一つ上流の兼山発電所に到着、発電所見学のあと、私が用水取水点の説明をした。大仙寺に宿泊する予定で兼山発電所で昼食弁当をすまし、大仙寺に荷物を預け、八百津水路式発電所見学。さらに丸山ダム建設予定地で、その構想の説明を受け、大仙寺に落ち着いたのは午後三時であった。本堂に集合、講習会を開く。

①久野庄太郎が木曾川上流取水点講習会参加の御礼と「愛知用水」と命名したこと、用水構想を説明した。

②木村總平（美濃太田出身、安城農林二十三回卒、前岐阜県議会議員）が挨拶。

③浜島辰雄より愛知用水調査の状況と概要説明。

山崎先生の講演

「日本は戦に敗れたが、農民が食糧を増産し、勤儉努力すれば、必ず復興する。これから

は、農業は科学的でなければならぬ。科学的農業に水なくて、何が科学性か。団結して、木曾川から水を引き、一致団結して農業に励めば、日本は必ず復興する」

特別講師 大仙寺和尚 大野勝道師

「中国の宋の代に、達磨大師が宋の玄宋皇帝に招かれて、宮殿の高楼から揚子江に浮かぶ何百とひしめく舟を見せられて、皇帝が、宋の殷賑いんしんを誇って自慢した時に、大師は皇帝に、『集まりし舟、たった二艘』と看破した。皇帝は、『何を見損じている』と再度尋ねれば、大師は、『名利の舟、たった二艘』と泰然として答えた。諸氏も名利を超越して努力すれば用水は必ずできる」と激励された。

当日、山崎先生の指図で特別参加された木村總平氏は、当時の武藤嘉門知事と特別近く、前県会議員でもあり、後日、高松宮殿下ご視察の際にも岐阜県内の問題に特別に力を尽くされ、そのため、「岐阜県内の愛知用水の諸問題に関しては、一切俺にまかせておけ」と武藤知事に言わせるほど知事の協力をとりつけ、岐阜県とのトラブルは一切表にならなかつた。また、その後の岐阜県内の用水受け入れが円満に進んだことなど、愛知用水の岐阜県受け入れに関する知られざる功労者であった。

「愛知用水取入口講習会 参加メンバー」

(昭和二十三年八月十二、十三日)

講師 山崎延吉、大野勝道

世話係 田村金平、久野庄太郎

特別参加 木村總平(岐阜県)

大府 山口治兵、加古与市、久野忠雄、浜島辰雄

上野 小島正雄、加古金造、富谷富市、山盛大和、石田秀之、本田佐久治

東浦 水野源次、仲川薫、平林利、鈴木和平、日高岩吉

阿久比 山本孝平、岡戸嘉一、竹内唯男

半田 沢田庄造、石川亀助

富貴 河合吉忠、粕山洋平

武豊 坂口善夫

河和 榊原文英、橋本栄一

小鈴谷 明壁京一

西浦 中野三一、谷川忠三、夏目善夫

八幡 近藤昇吉

内海 大岩源平、石黒新三

豊浜 山下秀夫、田中兵衛、新田与吉

野間 渡辺万吉

8 農林省開拓局長との特別会談

「農林省開拓局長伊藤佐が来たる八月十八日、豊明の中島に墓参に来る。ぜひ会って話をするように」と三浦青一より久野さんのところに連絡があった。

会合の場所は豊明農業協同組合の日本間、日時は八月十八日午後二時ということであった。都合のよいことには、当時の農業協同組合長は三浦青一だったし、地元の伊藤佐の幼友達の村山錐治、近藤博文、近藤為助が同席したことであった。

用水側は久野庄太郎、浜島辰雄の二人で、まず農協組合長三浦青一から農林省開拓局長伊藤佐の紹介があり、朋輩であった村山錐治、近藤為助、近藤博文、次いで愛知用水の発願者の久野庄太郎、浜島辰雄の紹介があった。つづいて、久野庄太郎より用水運動の進捗状況について、現在、知多の市町村長を中心に用水建設の推進団体を結成しつつあり、この二十一日には、半田市長を含めて一市二十五カ町村長の会合があり、町村長を中心に推進団体をつくる予定で、用水の現地の調査は浜島と二人で進めていて、できかけの図面を出して浜島が計画の概要を説明した。局長は極めて真剣に話を聞き、郷里のことでもあり、格段の努力を約束し、地元がまとまったら、農林省開拓局に陳情に来るようにと約束をした。

その時期は年内で、陳情を受ける側の態勢も整えておく。地元も市町村、農村同志会が一体となって、活動できるようにまとめておきたいと話が予想以上に具体的となった。昔から豊明村は若王子池、勅使池、大蔵池の溜池灌漑で、その他、大小さまざまな溜池により灌漑をしているが、昨年、早魃の被害は、収穫皆無の所もあり、何とかしなければならぬと

ころであるところも説明した。

9 知多郡町村会での用水建設期成会設立

(昭和二十三年八月二十一日 於・武豊警察署会議室)

さきに用水建設に関し、田村金平(愛知県農業者知多支部事務局長)より、知多半島のこと半田がリーダーとなってことを進めていくのが慣例になっているので、知多郡町村会長である武豊町長中川益平の諒解を得て、半田市市長森信蔵に愛知用水建設期成会設立について半田が先頭になって運動するようにお願いに行った。

愛知県知多事務所より前記の件に関し知多郡町村長会において説明をせよとの連絡があり、八月二十一日の会合となった。

[出席者]

愛知県知多地方事務所長 森山貞之丞

同農地課長 青木竹三郎 同事務局長 大岩忠以知

知多郡町村会第一部落(○は部落長)

第一部落 武豊町長 中川益平○ (四人)

富貴村長 斉藤与光

阿久比村長 榎本茂

東浦村長 水野新

第二部落 大府町長 山口愛次 (五人)

有松町長 浜島計郎

大高町長 久野貞三

上野町長 小島慎一郎

横須賀町長 高津元治○

第三部落

八幡村長 花井束 (五人)

岡田町長 竹内玉一

旭村村長 森快玄

大野町長 (農地なし)

三和村長 高橋徳○

第四部落

鬼崎村長 伊藤如実 (四人)

常滑町長 滝田次郎○

西浦村長 久田慶三

小鈴ヶ谷村長 近藤恭坪

第五部落

野間町長 森田新之丞 (七人)

内海町長 西山茂

河和町長 酒井昇平

豊浜町長 相川筆吉

師崎町長 大松逸郎○

篠島村長 (地区外)のち水道

日間賀島村長 (地区外)のち水道

町村会長中川益平が、愛知用水運動に対する今日までの経過を説明、森半田市長が、今後の運動には半田市は、知多郡町村会の動向に同調するとの意見をのべ、久野庄太郎さんが愛知用水の概要を説明し、私が出来上がったばかりの「愛知用水計画概要図」を掲げて、木曽川からの用水建設の可能性、導水路計画について説明をした。話があまりにも膨大で夢のような話。一同声なし。

しばらくして、常滑町長滝田次郎が立って、

「皆さん、どうですか。夢のような話ですが、用水ができることはよいことだと思います。久野さんの夢を私達も見ようではありませんか。夢の見質に半田さん十万円出していただけませんか。私達も二十万円出そうじゃありませんか。農業協同組合も応分の協力をいただくものとして、上流の愛知郡、東春日井郡にも働きかけてみようではありませんか」と話しかけたが、茫然として声なし。

ややあって、滝田町長から「よろしいですね」と念を押した時、初めて夢から覚めたように、いっせいに拍手が起こった。

「それでは、その線で話を進めさせてもらいます。そこで、この会の会長には、半田市長森信蔵さん、副会長には私の方の会長、武豊の中川益平さんをお願いすることとし、各地区の部落長はその補佐役ということでお願いします。いずれ各市町村の農村同志会員から具体的な相談があると思いますので、よろしくお願い申し上げます」

10 市町村学区説明会の実施

(昭和二十三年九月～十月)

第一回 阿久比草木小学校、同学区

第二回 阿久比英比小学校(大塚洞外師出席。質問あり、人気わく)

第三回 大府第三小学校

第四回 大府神田小学校

第五回 大府吉田小学校 大きな彗星、西南から東北に飛ぶ

第六回 東浦森岡小学校

以下、緒川、石浜、生路、藤江、常滑町、河和町、各町村、ほとんどの地域で実施した。浪曲「都築彌厚翁の苦心談」に聴衆が感激している幕間に、久野さんが、その頃出来上がった、「愛知用水計画概要図」(縦四メートル、横二メートル)を掲げて説明した。話も聴衆を魅了して、人気を博し、各町村とも競って説明会が開かれた。

東浦藤江学区、安徳寺の会(九月下旬)

当日は朝から雨で、寺の本堂一杯の入りであった。例のごとく梅が枝鷺による都築彌厚翁の浪曲は十時から始まり、聴衆の感激覚めないうちに久野庄太郎さんが大きな地図を掲げて熱演、私も図に乗って計画の説明も慣れてきた。質問も多く、藤江の新美区長さんも、これだけで終わらせるにはもったいないと、自宅に昼食を用意して役員十数名の昼食会を開いていただいた。酒も入り、宴も盛り上がった。その時、区長さんが、「私の弟です」と紹介さ

れた緋衣の立派な坊さんが出てきて、

「今日は大変よい話をいただいて、私も感激しました。今日は拙僧が、愛知用水はできるかできないか、八卦はっけを見て進ぜる」

と言われた。聞けば、東大寺の系列の寺の住職で、奈良の東大寺の近くにあり、易学の大家であるといわれている人であるそうだ。

久野さんはとっさに私の顔を見て躊躇ちゅうちよした。私も首を振っている。二人とも思いは同じ。もし、この用水はできないという卦けが出たらどうするとの迷いである。二人だけならとにかく、大勢の前で取り消すことはできない。

そんなことにはおかまいなしで、立派な机を前にして、香を焚き、算木、筮竹せいちくを紫の袱紗ふくさから取り出し、九字を切り、真つ赤な顔が汗みずくになり、真に迫って、出た易語は難解でわからなかったが、「狐、河を渡って、その尾を濡らす」という卦だそうだ。

中国では、狐は秋になると集団で移動する。河を渡る時、尻尾を立てて濡らさないように泳ぎ渡り、大狐は向こう岸に飛び上がるまで、油断せずに尻尾を濡らさないよう立っているが、仔狐は飛び上がる時、まず渡ったと油断して尻尾を下げる。そこで尾を濡らし、その尻尾の重みで向こう岸に飛び上がることができずに、河に流されてしまう。

「愛知用水は、最後まで油断せずに努力すれば、必ずできると大喝された。」

私達はやれやれと胸をなでおろした。その時以来、久野さんと私の間では、調子に乗って油断したり、事がうまく進まず悲観して弱気になったりすると、「尻尾下げたか」とお互いに励まし合った。考えてみると、あの頃は若く真剣であった。

これまで、知多半島の人々が長い間、いかに“水”を求め続けてきたか。また、やむにやまれず、農民達が用水運動に立ち上がった過程を素描してきたが、つねに運動の先頭に立ったのは久野庄太郎さんであった。彼の生いたちや、彼がどのように生き、農民として過ごしてきたかを描くことによって、知多の農民たちが避けられなかった旱魃との厳しい闘いの日々がいかなるものであったか、また、久野さんと知多の農民の像を重ね合わせながらその現実を読みとっていただけれると思う。

次章では庄太郎さんの自伝『躬行者』他をベースに、若き日の庄太郎像を描出してみたい。